

JOURNAL



Contents

- くるめフォーラム2008レポート…特別企画 竹信 三恵子(朝日新聞編集委員)
- くるめフォーラム2008レポート…記念講演 香山 リカ(精神科医・立教大学教授)
- くるめフォーラム2008 「見抜こう!拓こう!変える勇気!」市民企画特集
- 誌上講座レポート…男女共同参画週間記念講演会
- 相談室だより…新聞紙上に掲載された性暴力関連記事
- 男女平等政策室からのお知らせ…審議会等女性委員登用率県内3位
- 登録団体紹介…高齢社会をよくする会・久留米
- 図書情報ステーションコーナー…新着図書案内

http://www.city.kurume.fukuoka.jp



くるめ発

登録団体紹介 高齢社会をよくする会・久留米
「心豊かに高齢社会を生きる」

私たち「高齢社会をよくする会・久留米」は、平成18年に誕生した「久留米男女共同参画推進ネットワーク」41の構成団体の一つです。すべての高齢者が、いきいきと暮らせる高齢社会を築くために、男女共同参画の視点をもって活動を続けています。現在会員は35名(内男性1名)。毎月1回の定例会では、社会保障を中心に法律の勉強や会員同士の交流・情報交換を行っています。

その主な内容は、介護保険・福祉問題等の学習、福祉施設の見学・研修(年1~2回)をしています。会員の中から、審議会等に参加し、福祉行政への提言を行ったり、要望書を提出したりしています。さらに、行政との意見交換、地域住民への情報提供や活動PRも積極的にしています。

最近では、元気に老後を送るためには、市民一人一人が「自己決定」する力を高めることが大事との考えから、各地域に向いて講演会やワークショップを行うなど、活動の範囲を広げています。今年のもくろみフォーラムでは地域会場で開催された講演とシンポジウムに共催参加しました。

これまで行政に多く提言をしてきましたが、グループで考えたアイデアが形になって、行政の中で目に見えるようになるのが私たちの喜びであり、活動の支えになっています。これからやってくる超高齢社会に生きがいをもち安心して暮らせるよう、他団体とも連携しながら活動を続けていきたいと思っています。新しい風を吹き込んでくれる仲間を募集中心若い方の参加大歓迎です。



図書情報ステーション

新着図書案内 思わず手にとってみたくなる1冊を紹介しします。

産める国フランスの子育て事情

牧 陽子
フランスでは、手厚い制度だけが理由で子どもを生き育てやすいのではないという。男性の家事育児参加や子どもの自立を重視した子育て観、女性の自己実現を当然とする社会、そして男性も女性も実現できるゆとりのある働き方など、インタビューを通して紹介しています。



おしゃれなカフェのお店をはじめめる本

早川 雅一・生長 弘丞
カフェを開業、経営していくためには体系的なノウハウと準備が必要不可欠。個性的で集客力がある店のコンセプトのまとめ方の他に、開業コストを抑える方法や資金調達テクニック、店内のデザインやヒットメニューの作り方など、プロの開業準備のアレコレが満載です。



「共育」宣言

高知工科大学大学院企業家コース
様々な分野の社会人たち(高知工科大学大学院企業家コースの社会人学生・卒業生・講師など)による共著。地域活性化、起業、子育て、住民運動などの問題をそれぞれが違った角度から捉えることで、新たな発見やヒントを見出し日常生活や仕事の改善から起業まで、夢の実現への思いが伝わってきます。



●徒歩/西鉄久留米駅から約10分(約700m)
●バス/西鉄久留米駅から約5分
JR久留米駅から約20分
「祝儀橋前」下車、徒歩3分
●駐車場(有料)はございますが、おいでの際はなるべく公共交通機関をご利用ください。

この情報は環境に配慮し、再生紙を使用しています。

KURUME FORUM 2008

9月27日(土) - 10月7日(日)

テーマ 見放ころ! 拓ころ! 変える男氣!

市内の41の女性団体・グループを中心に、今年も久留米女性国際記念事業実行委員会が結成され、何度も集まり話し合いながらフォーラム2008の準備が進められました。

期間中は、記念講演、映画上映や展示・バザーのほか、男女共同参画社会実現をめざす活動をしている団体やグループからの応募により「え〜るピア久留米」内外で15の市民企画が実施されました。演劇、ワークショップ、パネルディスカッション等、工夫を凝らした多様な企画をご紹介します。

演劇・フリートーク 昨日・今日・明日 女と男



男女が共に自立することの大切さを前でも訴え、フリートークの中で、さらに共感の輪を広げました。

久留米男女共同参画推進ネットワーク


上映会・フリートーク 戦時下の女性たち



女性や子どもを犠牲にする戦争…。バプア・ニューギニアの人々の証言に向き合い、戦争と平和の大切さについて語り合いました。

筑後地区平和を守る女性の会

寸劇・ワークショップ 生活の中で気づく? じえんだ〜モンダイ



既読者の呼び方が難しい…。日常生活で見逃しがちな言葉や習慣など、身近なジェンダー問題を考えました。

NPO法人 ふ・パト


対談 「食」と共に生きて



食心して食べられる物を持っていく人、努力の裏面を知りました。

チーフ かつらこ

演劇・演奏 おはなしと音のこのせて 一冊本の中でみつけよう おはたらしごと



フルートやピアノにおおむねおなじみで、心豊かになった自分を見つけたい…。こんな時間を知ることがうれしかった。

ローズマリー

寸劇・演劇・パネルディスカッション 地域に一步踏み出して



笑いながらも考えさせられた劇、皆思いっぴいのお話、熱心なディスカッション、農村の課題を取り上げた充実の企画でした。

新の島・久留米支所

市民企画特集

演劇・ワークショップ 傷ついた子どもの心に寄り添って〜DVの被害を受ける子どもへの支援



傷ついた子どもの心に寄り添うために、DV中の子どもや保護者を知り、子どもへの支援方法を語り合いました。

Support of the Child

寸劇・パネルディスカッション 地域で人間らしく生きる! 一男女共同参画社会の実現のために



働きながら子育てや介護に両立する女性たち、生活も夫入りがら働き続けるのは、簡単ではありません。

みだかの会

ギター演奏と合唱 歌いとばそうジェンダー! 歌いあげよう私たちの人生!



ソーラン節で「めがせ平塚、井原か、こながれ女太鼓!」を夜も一緒に楽しみました。

S・ぼ〜よるリボン

ワークショップ 恋愛カフェ〜恋・愛についてたくさん話そう!!〜 リラックスした雰囲気の中で、それぞれの恋愛観を語り合い、「デートDV」について考えました。



デートDV防止ゲームさくらんぼ

三浦公民館



演劇・演劇 男・女(みんな)の自立と進歩 ワタシだったら、アナタだったら、どうする? 性別的自立に向けて改めて考え、平等の大切さを学びました。

三浦女性ネットワーク

田主丸そよ風ホール



演劇 男女にちあえあう仲間づくり 男女にちあえあえに生きていく…子どもを産みながらの子育て奮闘記、一冊、感動と勇気を頂きました。

田主丸女性ネットワーク

北野公民館



演劇 フォッションショー いつまでも 若く!美しく! 折り紙を織り込んだデザインの衣装、鮮やかな色使いの衣装へのみなぎるような衣装は、若い人たちにエネルギーを分けてくれました。

北野女性ネットワーク

福岡公民館



演劇・シンポジウム 高齢社会を生きる〜そして暮らしやすい環境に〜 すべての高齢者がいざいざと暮らすには、男女共同参画の視点が欠かせないことを具体的に学び合いました。

福岡女性ネットワークと高齢社会をよくなる会・久留米



記念講演 自分らしく生きるための処方箋

講師：伊山 リカ（精神科医・立教大学教授）

学生時代より読書などに専攻。その後も臨床現場を軸として社会批評、文化批評、春闘などを手掛け、現代人の「心の病」について洞察を続けている。専門は精神科臨床だが、テレビゲームなどのサブカルチャーにも関心をもち、新聞・雑誌などへの寄稿も数々。著書に『仕事でだけ「うつ」になる人たち』ほか多数。

このレポートは9月28日に行われた講演の一部を抜粋し、センターで要約したものです。

偏見や決めつけの「壁」

私は昭和51（1986）年に精神科医になりました。当時は、女性でも好きな仕事につけるという雰囲気は高まりつつあったけれどもまだ男当りには強く、医師の世界でも、特に外科などは女性の医師に対する周囲からの偏見や決めつけといった「壁」がありました。私は比較的的女性に対する「壁」の低い精神科医を結果的に選んだのですが、「よりによってなぜ精神科なんて普通じゃない科を選んだのか」と周りから言われ、別の意味での「壁」に当たりました。一方精神科に来る患者さんも「自分もとうとう精神科に来るようになってしまった。人生終わりだ」と思われ、「『うつ病』と診断書を書かれたら会社をクビになる」となどの偏見や決めつけがありました。実際は他の診療科とほとんど変わらないのに、精神科医は世間からは偏見・差別の眼で見られていました。最近は精神科や「うつ病」などの心の病に対する認識は進んでいて、治療すれば治る病気として認識されてきています。

自分に満足できない女性たち

男女共同参画が進む中で、皆さんの努力によって女性が自由にやりがいのあることができる時代近づいてきています。しかしその一方で、特に働く女性に様々な問題が起きている。まじめに働く女性ほど、完璧主義、理想主義、自分に厳しすぎる、あるいはなかなか自分に満足できないなどの理由で、いつも自分に厳しかったり、走り過ぎてヘトヘトになっている人も少なくありません。職場でも、最近多くの会社で「仕事もバリバリでできて、家庭も大事にして、子育てもしっかりしてそれが当然」という「スーパーウーマン」みたいな女性が登場しますが、実際にはそういう人はあまりいないと思います。そんな「スーパーウーマン」として紹介された人が、実は人に言えないような悩みを抱えているようなことも多いのですが、マジメな人ほど、「こうならなければダメなんだ」と思い込み、「今の自分ではダメだ」と自分を否定し、中にはうつ病などの心の病になってしまうケースもあるのです。

失敗を繰り返すのはなぜ?

家も高収入な人は、一つ失敗すると、過去に自分がした類似した失敗を全て思い出し、それらを全て関係付けてしまう傾向があります。さらには「家も同じ失敗をしてしまうだろう」と予言までしてしまいます。このことは強い自己暗示をかけているのと同じで、ついには潜在意識がそのとおりに実行してしまうのです。そして自分たちの生活をますます窮乏なものにしてしまっています。しかしよく考えると全ての失敗は、それぞれ偶然に起こったことで、関係性はなくて、しかもそういう失敗の時には、成功体験が無数にあるのに、できて当たり前のこととして忘れてしまっています。こんなときは、失敗をできるだけ狭く考えることが大事です。「失敗したが、これは今日だけのことで」とか「偶然起こったことで、自分は悪くないんだ」というように。そうすることで失敗を過去にも未来にも広がらないことが大事です。

自分らしく生きるためには

今の自分に満足できずに、30%できるとしてでもできなかつた70%のことばかりに眼を向け、ヘトヘトになるまで走りつづけている「完璧主義」の人は、できなかつた自分を買めるのではなく、30%できたと自分を励ましてあげること、もう少し日常生活の中でうまくできたとや普通にこなせたことに対して、自分自身をねぎらったり、褒めてあげることが大事です。そして家には頑張っている自分に対して、ご褒美をあげるなどしたらいいと思います。日頃の頑張りを評価して、ねぎらって、その「頑張リ」へのご褒美で豊かな時間を過ごして「いい人生だな、楽しいな。頑張っただけの甲斐があるな」と思いつつ、心豊かに生きていくことができるといいと思います。

映画上映会 ミス・ポター

2008年 アメリカ
O監督：クリス・ヌーナン Oキャスト：レニー・ゼルウィガー、ユアン・マクレガー

今年で20回目を迎えた「くろめフォーラム2008」映画上映会は、100年以上もの間、世界で一層愛されているうさぎ「ピーターラビット」の作者ビアトリクス・ポターの恋と旅に満ちた半生を描く「ミス・ポター」を上映しました。

良家の娘が結婚しない仕事を持つことなどありえない時代に、独立作家として独立し、イギリス湖沼地方の自然を守るという大事業を成し遂げたポターの生き方は、現代に生きる私たちに多くのヒントを与えてくれました。

参加者からは、「主人公が楽しみを乗りこえて、自分の夢に向かって力強く生きていく姿に感動しました」「当時の英国において、女性という立場で困難に立ち向かった勇氣に拍手を送りたい」等多くの共感の声が寄せられました。



男女共同参画週間記念講演会

私たちの思いを政策につなげるために

地域に活かそう! 生活者の視点

～今のわたしたちができること～

講師：たもつ ゆかり（オフィス ヒューマン）



このレポートは9月28日に行われた講演の一部を抜粋し、センターで要約したものです。

「つばやき」探訪

このような講演をやっていくと、色々な所で色々な話を聞きます。それらの話の中から、ひとこぼれ落ちる「つばやき」は、それぞれの立場を生きる日々の暮らしの中からのものであり、私は、それにこそ、地域生活の視点にたった地域づくりへの要諦があると思います。男女共同参画の文脈で言えば、地域づくりにおいて、性別にかかわらず多様な人が尊重され多様な人の参画が保障されているのかということ、特に現状では、女性の参画が圧倒的に足りない状況への問題提起が、この一つひとつのつばやきの背景にはあります。「地域づくり」というと、どうしても行政が主体で、「地域課題」からがスタートのような意識がありますが、地域づくりの主体は私たち地域生活者であり、「地域課題」の解決は「生活課題」があります。それぞれの暮らしの一端からつばやかれる一人ひとりの声、つばやきには「生活課題」が集約されています。この「つばやき」に地域づくり政策はどう応えるかということが、究極、より良い暮らしづくりに向かうことです。行政は、この個々のつばやきの一つひとつにダイレクトに応えることはできませんが、地域づくりの主体であるべき私たちに、そのつばやきの背後にある社会の在り方について考える力が求められており、その力を磨くには、男女共同参画の視点が欠かせません。

地域に活かそう! 生活者の視点

男女共同参画社会基本法や久留米市条例で、これまで国会の不平等によって、地域づくり政策の形成過程において少数派であり、その経験が少ない女性の補正、「ポジティブアクション（積極的改善措置）」として、力を付けるための取り組みを行うことが久留米市の責務として要請されています。これまで久留米市に限らず各地で、色々な活動してきた女性団体を代表する方々が主として、審議会や委員会に登用されてきました。しかし、常に少数派である女性の側には、そのような場で意見を述べたりするということの経験が蓄積されず、女性の参画の機会を十分に活かすということは難しかったのではないのでしょうか。

しかし、このような現状において、生活者の視点を地域づくりに反映するためには、これまで男性よりも、より地域生活の担い手として活動してきた女性の参画の状況の量と質をあげていかなければなりません。まず、現在、地域づくり政策の形成過程に参画している人たちは、それぞれが代表している立場に集う人のそれぞれの「つばやき」の背景に、社会の在り方の歪みや矛盾を感受し、そこから地域課題を掘り出し出すという地域生活者の代表としての役割を果たしてほしいと思います。その力量形成には、性別にかかわらず多様な人のあふれる社会システムへの関心を高める、男女共同参画の視点を磨くことが必要であり、「つばやき」こそ、地域生活者の視点に立った地域づくり、より良い暮らしづくりのための糧だと思います。

協働のまちづくり～今のわたしたちができること～

地域課題が多様化・高度化する今日、「協働」ということが、地域づくりの有効な手段として注目されています。これまでのように、地域課題を解決するための主体が行政のみではなく、地域を構成するあらゆる個人・あらゆる主体による協働が要請されています。その主体として、今、大いに期待されているのがNPOであり、地域コミュニティです。特に、よりよい暮らしづくりのためには、暮らしの現場である地域コミュニティにおける住民自治に根ざした取り組みが重要で、

地域課題を解決する力の確かさは、「問い」を立てる力です。今、私たちの暮らしがどうなっているか、何が問題なのかというリアリティに近ければ近い程、その「問い」はより確かです。だからこそ地域づくりの最先端は皆さんの日々の暮らしが営まれる地域であり、この「問い」のリアリティには、一人ひとりの「つばやき」の1個ずつがあります。このつばやきに誰がどのような視点で向き合い、どのような「問い」を立てるのかということが、究極、地域づくりの力量に関わります。地域のみならず支えあうということが、ほんとうに力を発揮するためには、地域の壁も排除されない～多様な人のあふれる協働の場をつくり、つまり、それぞれの地域コミュニティにおける「人権」の力が重要です。「男女の人権の尊重」を基礎とする男女共同参画の視点に立つことにより、多様な「問い」を掘り出す力が、これからの地域づくりに求められており、その力こそは、住民自治の基本であるべきではないでしょうか。ぜひ、久留米市における協働のまちづくりを進めるために、地域コミュニティにおける多様な取り組みに男女共同参画の視点を通していただくとお願いいたします。



特別企画(市民企画) 企画実施:北京JAC九州 in久留米・女問研

女性はなぜ貧乏なのか?

講師:竹信 三恵子(朝日新聞編集委員)

(このレポートは9月27日に行われた講演の一部を抜粋し、センターで要約したものです。)

1 女性の現実…貧乏

女性が貧乏というのは、意外に知られていないようです。でもデータを見ると、現実はいくらも現れていて、年収300万円以下は女性で65.5%、男性で20%です。週40時間以上働いているのに年収200万円以下の人をワーキングプアといっていますが、この人たちが、女性で4割強、男性は1割弱です。

女性が金持ちもいるじゃないのと異論がでてきますので、高い方をみると、年収700万円以上は男性で2割、女性はたった3%なんです。こんなに差があって、女性の所得は明らかに低いんです。

それにしても、700万円というのは、東京で30歳以上のサラリーマンの年収なのですが、最近そんな正社員の数が減ってきています。80年代の初めごろは、男性では9割以上が正社員でしたが、昨年は8割にまで下がっています。女性の正社員は、85年には約7割でしたが、06年は47.3%で半数をきってしまいました。女性の世界では、パートや派遣など非正規で働くのは当たり前のことになっています。

2 ふたつの「リ」で崩れる安定

最近、男性の貧乏が増えて、ワーキングプアが問題になってきていますが、今まで、女性の貧乏が問題にならなかったのは、なぜでしょう。

女性は昔から貧乏でした。かつて、結婚退職というひどい制度もたくさんあり、また、女性の多くは20代後半になると給料が上がらなくなる賃金(私は「運たきり賃金」といいます)も一般的でした。そんな中でも女性たちが暴動もおこさずやってきたのは、家族賃金の考え方で男性の給料と雇用を保障する終身雇用の仕組みが企業にあり、離婚はさせないという社会政策的な政府の方針もあったからです。結婚した女性を路頭に迷わせない、そのかわり育児・介護をやってもらうというわけです。リストラと離婚(ふたつの「リ」)がなければ、何とか安定を保っていたのです。

しかし、30年ほど前から低成長期にはいり、経済のパイがふくらまなくなって、日本の社会は大きく変わってきました。90年代には、銀行がつぶれ、大リストラがどんどん進みました。雇用保障はなくなって、家族全員分を稼ぐために、男性は長時間労働を強いられています。正社員後に置きかえられた非正規社員は、ヨーロッパでのパートタイム労働者とは大違いに、とてもひどい状況です。

3 仕事があるのに、有期雇用って、変!

仕事があつとあるのに、有期雇用で働いている人が、日本にはあたり前のようになっています。しかし、ヨーロッパでは、仕事があるのに有期雇用にすることはできません。そんなことをして、解雇するのはずるいじゃないか、雇用が不安定になって皆幸せに生きられなくなるではないか、ということで仕事があるうちは安定して雇うのが原則なんです。

4 「同一価値労働 同一賃金」を私たちのルールに

日本の非正規雇用は、雇用が不安定な上に賃金がひどく安い。非正規の女性の賃金は、なんと男性正社員の40%台です。それが今男性にも広がっているのですが、一方で、女性がすれば「単純労働」になって、賃金が低くても当たり前という現実があります。例えば、秘書という仕事はその典型です。男性がやっている秘書課長や社長室長というのは、単純労働とは考えられていませんが、女性の秘書業務は単純業務と認定され、賃金差別を争う裁判で負けの例があります。こんな詐欺みたいなことを改善していくには、「同一価値労働 同一賃金」のルールがぜひとも必要です。女性がやっているという理由で極端に安くされている賃金を、公正に評価すべきです。

5 主婦は優雅に暮らせる?

このように、女性の仕事の現実、問題がいっぱいなのですが、では、主婦ならどうか。夫のいる主婦はリッチではないか。「カリスマ主婦」というのも聞こえてくるし、あくせく働くより「主婦がいいな」と思う若い女性もいるようですね。でも、カリスマ主婦というのは、主婦ではなく、自営業者。社長なんですね。

今、結婚すると優雅に生活できると思っていたら、落とし穴がいっぱい。夫のDVでひどい目にあうかもしれないし、夫がリストラになるかもしれません。いずれ、女性も働くことになるのですが、そこで待っているのは、ひどい格差の賃金と不安定な雇用です。

6 格差是正への政策的な目をもとう

シングルマザーや離婚した女性たちは、たいてい非正規で働くしかありません。時給800円で週5日働いても年収170万円弱。子どもがいればとても足りません。年収300万円は欲しいと、夜に外食産業で働き生活をつないでいる人たちは、3000時間以上働かねばならないあり様です。

児童扶養手当は削減の方向にあり、税制も低所得者に厳しくて、所得の再配分という機能を果たしていません。女性の貧乏をなくしていく上で、こういう政策にも目をむけていく必要があると思います。

結婚制度の外にいる女性たちは、現行のシステムの典型的な被害者です。結婚の有無が経済状況を左右する制度というのは、女性にとって屈辱的です。女は結婚すればいいと経済的自立への政策をとってこなかったことに、今こそNOを言うべきだと思います。



相談室だより

今回の「新聞記事から見えてくる女性に関する問題」は、性暴力事件です。新聞に掲載された性暴力関連記事「女性情報誌」という新聞切り抜き誌があります。今年8月の1カ月間に新聞紙上に掲載された性暴力事件関連記事は、セクシユアル・ハラスメント判決2件、強かん判決3件、18歳未満への強かん判決2件、少女への売春強要1件、ストーカー事件判決3件、痴漢行為判決2件、公然わいせつ、スカート切りつけ各1件ずつの計15件でした。これらの事件に共通しているのは、実の父親から娘への性虐待1件以外、知らない人からの行為だということです。性暴力にあいては、訴えるという形で顕在化できるのは願見知りではないケースがほとんどで、願見知りのケースはなかなか訴えられないのが実情です。

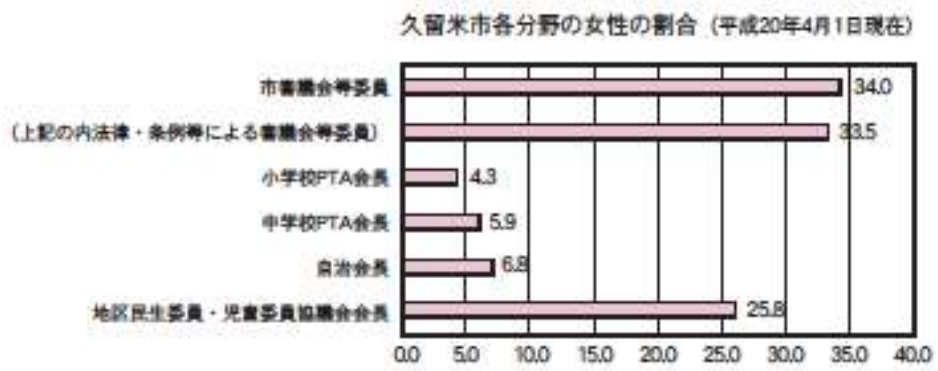
何らかの力関係があるために、訴えることが被害者自身が居心地の悪い思いをしたり、逆に働くことが多いためです。実際に「女性情報誌」を覗いてみると、司会者がコメントの中で「そんな時間に出歩いて」とか「胸の開いた服装をしていて」とか「自分かわからなくなるほどお酒を飲むなんて」と、事件に至ったのはまるで被害者のほうに落ち度があるからかのような言い方をしているのを目にします。このような状況の中、東京強姦救済センターの統計が示す性暴力事件は、願見知りからの犯行が約65〜70%という数字から推えると、今回の新聞記事に現れているケースは、氷山の一角といえます。性暴力は加害者の責任

性暴力は、性衝動が原因ではなく、加害者が自分の征服欲や支配欲を満たすために性的手段を使っているのです。事件が明るみに出た時、加害者は、被害者の態度などを加害の言い訳に使いますが、被害者がどのような状態であろうとも、それを利用して加害行為に及べばそれは加害者の責任です。多発する性暴力の要因は、女性を性的対象物としてとらえる意識と、暴力を容認する意識です。この意識こそが問われなければならないでしょう。

新聞掲載の事件は氷山の一角。実際に、性暴力事件で刑事告訴までする人は非常に少なく、民事訴訟もそんなに多くはありません。何故なら、親しい人からの性暴力は、加害者と日常的に顔を合わせる立場にあることがほとんどで、そこには

男女平等政策室からのお知らせ

市町村名	女性比率(%)
宗像市	35.9
筑前町	33.9
久留米市	33.5
古賀市	32.5
福津市	32.4



審議会等女性委員登用率 33.5% 県内第3位

本年、4月1日現在の登用率は34%で平成19年度の目標を達成しましたが、このうち、法律・条例などに基づく審議会への女性の登用率は33.5%で、これは宗像市の35.9%、筑前町の33.9%に次いで県内第3位となり、前年度の第6位を上回りました。しかし、上表のように、中学校PTA会長や自治会長は10%を切るなど、まだまだ地域における役職には女性の割合が高く、今以上に女性の参画の拡大が必要です。地域における男女共同参画の現状を把握し、今後の施策に反映させるため、今年度は市が補助金を交付している団体への男女共同参画状況調査を実施いたします。この調査は平成18年度に続き2回目となります。

私たちの社会は、男女で構成されています。男女があらゆる分野に、共に参画できるまちづくりを進めるには、身近な地域をはじめとして様々な分野に男性と女性が対等な立場で参画していける環境づくりをすすめていく取り組みが期待されます。

男女共同参画社会基本法 (政策等の立案及び決定への共同参画) 第5条 男女共同参画社会の形成は、男女が、社会の対等な構成員として、国若しくは地方公共団体における政策又は民間の団体における方針の立案及び決定に共同して参画する機会が確保されることを旨としておこなわれなければならない。